



住吉教会 2016年度テーマ
「いつくしみ深く 御父のように」
—いつくしみの特別聖年—

祝福とは

傘木澄男神父

聖体拝領でカトリック信者でない人には祝福が与えられますが、信徒奉仕者が並んで拝授している時も、司祭だけが祝福を与えるのが未だ普通の様です。祝福は信徒にはできないのでしょうか。そもそも祝福とはどういうものなのでしょうか。

人を「祝福する」(ラ・bene-dicere)とは、文字通りその人について「良く言う、良いことを言う」という意味です。「全快されて良かったですね」とか「あなたにお会いできて嬉しい」とか、その人の良い所を見て、それを喜び感謝することです。「祝福とは神の身近さを、目に見え知覚できるものとする」と言う人もいます。昔の人々は「言葉には魔術的な力があり、特に或る言葉が厳かに発せられたり繰り返されたりすると神秘的な力を発揮する」と考えました。祝福と、その反対の呪(のろ)いは、こうした考えから生じたものと言われます。

祝福の原型は聖書の冒頭に示されています。神は六日で万物を創造され、終わりに「それを見て善しとされ」、人と全ての生き物を祝福して「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」と言われました。イエス様も子供や弟子たちを、そしてパンを祝福され、また敵をも祝福するよう命じられました。聖書には人間もまた子孫の繁栄を願って「父が子を祝福する」などのことが数多く記されています。祝福は祈りの言葉や十字架の印、それに按手や聖水や塗油などの儀礼的な動作で行われます。ミサの開祭の挨拶や「主は皆さんと共に」の言葉や派遣の祝福は、ミサ自体のもたらす祝福を鮮やかに示しています。

祝福がこういうものなら、現代でも古い時代の様に、一般生活の場でも親や大人が子供や若者を祝福するのは望ましいことでしょう。年長者、特に高齢者は、若者たちが勇気と自尊心を取り戻し希望をもって前進するよう、彼らを愛し尊重して生きる喜びを分かち合いたい、彼らを温かく祝福してやりたいと思うのですが、彼らは古い人間の祝福など望んではいないかも知れません。その様に見えます。でも本当にそうでしょうか。彼らは心の奥ではその欲求を持っている、真剣に私たちの祝福を求めていると思います。若者を祝福するとは、彼らに「あなたの生き方と行動は私たちに不快でも脅威でもなく、むしろ喜びと励ましなのです」と告げて、大きく受け入れる温かいまなざしを向けてやることです。彼らの見かけの無関心は、彼らの人生に祝福が欠けていて、彼らがそれを熱く願っていることの兆しとも言えましょう。その祝福を私たちは与えてやらなければいけないと思います。神様は限りなく祝福しておられます。その神様の祝福を私たちも取り持ってやることのできるのではないのでしょうか。(以上)